

# 環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	13
瑪瑙集	25
紅玉集	28
俳誌交歓	29
2月号月評	30
恵贈句集拝見(29)	32
特別作品「秋の東尋坊」	34
琥珀集作品鑑賞	36
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	37
Ⅱ	38
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	39
他誌転載	41
ベルシャの人	43
枇の国父の蒼天(23)	44
昆陽池・柿衛文庫吟行	46
人の振り見て	48
ひこばえ会通信(8)	49

今月の一句

消しゴムの魂抜けまろび試験果つ 桂樟蹊子

(昭和四十年作)

入学試験が終わる最後のベルが鳴った時、一人の受験生の消しゴムが机からまろび落ちた。どこからともなく溜息とも、安堵とも知れぬざわめきが起きる。試験に立ち会われた師は鋭くその瞬間を詩にされた。

隆子

# 狩の歌

塩路隆子

わが肋撫でつつ寒夜眠られず  
せがまるる弥次喜多ばなしとろろ汁  
茜空に火の棹となる冬の雁  
風邪癒えて羽化の心地や風呂あがり  
をみなとて焚火囲めば狩の歌  
ご成婚記念の硬貨煤払ふ  
饒舌へ「煮崩れますよ」ちりの鍋

# 二月号光耀抄

塩路 隆子選

神鹿は終始耳立て夜の神事  
健在を近隣に誇示大噓  
龍馬伝語るに紅葉且つ散れり  
石仏の里の日ざしに干し大根  
相撲甚句を流すちやんこ屋爛の酒  
絵を添へて今年も終はる花日誌  
そぼ濡れし踊子の道冬椿  
白味噌と煮干の匂ふ蕪汁  
終活や急くまい急くまい餅を搗く  
数へ日や原稿用紙二行ほど  
年の暮癖の直らぬ竹箒  
ふるさとの亥の子の記憶わらべ歌  
ロケットになりたき男の子七五三  
午後二時の吾が家の紅葉眺めをり  
枯蓮の池に古刹の鐘渡る  
暮六つに冬の夕焼け浮かびけり  
安曇野の空一枚や寒茜

小林 成子  
阪本 哲弘  
北尾 章郎  
鈴木 照子  
森下 康子  
田下 宮子  
坂上 香菜  
笠井 清佑  
宮崎 左智子  
吉田 希望  
岡 佳代子  
片岡 久美子  
新実 貞子  
長濱 順子  
川崎 利子  
田中 芳夫  
前川 ユキ子

夜回りの水谷先生講演中  
 数の子をぷちぷち噛める人魚姫  
 小夜時雨軒借る店の紅を買ふ  
 十二月八日食パン賞味期限切れ  
 朝霧の消ゆるはかなさ順不同  
 山門や夕影長き落葉搔  
 繰り返す「これなあに」攻め秋うらら  
 野仏の膝下にこぼれ実南天  
 子牛像包むやはらか赤ケツト  
 吾が家までを韋駄天走り息白く  
 鴨鳴けば広目天の筆動く  
 賀状数枚答案は六百強  
 山んばが通草引つ提げ戸を叩く  
 高曇り紅き冬芽の句読点  
 虎落笛生涯同じ山を見て  
 子規の書を読むや膝掛け深ぶかと  
 死ぬまでは女でゐたし節料理  
 雪ばんばもう来る頃や峰淡き  
 古民家の燻る竈や冬ぬくき  
 熊除けの鈴音重ねスイス風

松田 和子  
 伊藤 憲子  
 藤見佳楠子  
 中村ふく子  
 中本 吉信  
 田村 幸子  
 桂 敦子  
 紀川 和子  
 五十嵐 勉  
 和田森早苗  
 宮田 香  
 常田 創  
 松岡 和子  
 石川かおり  
 杉本 綾  
 塩路 五郎  
 竹内 悦子  
 小澤 菜美  
 山口キミコ  
 坂根 宏子

鷹渡る正成公の挙兵あと  
 振込みのミシン目剥がす十二月  
 座して悠揚枯山水の冬景色  
 一湾にどかと居座る小春風  
 帆船のマストに絡む冬の雲  
 初春の天掴みたる嬰の拳  
 真向うに初冠雪の伊吹山  
 お似合ひよ夫の外出の冬帽子  
 石露日和想ひふつつ父のこと  
 湯気立てるレトロな薬缶夕厨  
 さまざまのポインセチアや花舗の前  
 日に三粒の鮫の軟骨年暮るる  
 木枯しや帰途を急く人身をかがめ  
 金秋に浮き立つところ旅の窓  
 雪見酒列車の外は別世界  
 太刀持ちて収まる写真七五三  
 冬ひと日庶民賑はふ浅草寺  
 ぴかぴかのジャケット並ぶ開店日  
 粧へる山を裂きをり滝落ちて  
 居間飾る鉢植糸一つ年用意

井口 淳子  
 伊東 和子  
 笹井 康夫  
 大島 みよし  
 落合 晃  
 山本 孝夫  
 三川 美代子  
 増田 一代  
 山崎 里美  
 大松 一枝  
 和田 郁子  
 安本 恵子  
 美濃部 くみ子  
 宮越 久子  
 村田 望  
 秦 和子  
 藤本 秀機  
 中川 すみ子  
 難波 篤直  
 西田 史郎

煌々と夜景の贅や河豚の鍋  
 寒柝やルンバのリズム打つてみる  
 暮早しことりことりと落し蓋  
 七百段二丁を掃く子黄落期  
 檜の実の散り敷く道や神さびて  
 初雪に妣の声聞く加賀訛  
 着膨れと言ひ訳しつつケーキ好き  
 落葉掃く彌宜の袴の青美しく  
 枯葡萄つまみ鳥葬ふと思ふ  
 振売の腕に食ひ込む赤かぶら  
 烏瓜より恵比寿大黒生まれ出る  
 峡深き樵の集落霧に濡れ  
 地酒あり味極めたるずわい蟹  
 毛利家の時雨るる墓域ほの暗く  
 囲炉裏辺に煙る大串岩魚焼く  
 湯豆腐の煮えごろ掬ふ風の夜  
 風はらみ鳥のごとしや紅葉舞ひ  
 荒天を鎮め磐梯秋の虹

能勢 栄子  
 高谷 栄一  
 田中 浅子  
 田中 眞  
 谷口 俊郎  
 辻 知代子  
 佐用 圭子  
 木戸 宏子  
 小西 和子  
 小林 久子  
 飯田美千子  
 池田加寿子  
 泉 秀行  
 伊庭 玲子  
 上南木伊都子  
 宇治 重郎  
 山本 節子  
 横田 矩子

# 琥珀集

良縁

阪本 哲弘

拓本の表装美しや秋日差  
山頭火の採りし拓本冬帽子  
良縁を願ふ巫女あり神送り  
領海を侵す漁船や神の留守  
ミュージカルの子の出番待つ文化の日  
健在を近隣に誇示大噓  
身に入むや夫人へ記す悔み文

おん祭り

小林 成子

若宮の絵屏風さすがおん祭り  
おん祭り馬上に父のまぼろしを  
夕づくや巫女の手焙いと小さく  
おん祭り後の疲れやはぐれ鹿  
神鹿は終始耳立て夜の神事  
年の夜の鐘ひびきけり雲井坂  
いよよ反る指に冬日や伎芸天

紅葉

北尾章郎

磁器皿に見合へる牡蠣を啜りけり  
母の介護を一家分担冬ぬくし  
大綿舞ふ老いの吹く息いなしつつ  
竜馬伝語るに紅葉且つ散れり  
絶景かな楼上よりの紅葉山  
放水銃の緊張気味や紅葉寺  
貸衣裳にはか舞妓の紅葉どき

干大根

鈴木 照子

花日誌

田下 宮子

小銭ゆるり数へて老女蕪を売る

冬もみぢ窮す山門岩船寺

石仏の里の日ざしに干大根

当尾の落葉の深し眠り仏

笑ひ仏目路に小春の握り飯

黄落やニューファシヨンの山ガール

声奪ふ風邪や加湿器ひとり言

稼働音

森下 康子

下田港

坂上 香菜

開発の街ビル毀つ年の暮

愛犬の癒しのポーズ冬日向

私流通す生き方根深汁

食洗器の稼働音聴く寒夜かな

折鶴が上手にできて漱石忌

相撲甚句を流すちゃんこ屋爛の酒

懐にしまふ諸々山眠る

娘に習ふ夫のピアノや冬温き

絵を添へて今年も終はる花日誌

椎の実を拾ふ母子や古墳苑 (馬見丘陵公園)

老姉妹住む家ひと霜の菊

風立てる魔女の箒よ枯葉舞ふ

友逝けり夫は無口に落葉焚き

語部の身振りの影絵大囲炉裏

紅葉落葉踏みて天城の峠越

冬鴟に唐人お古墓碑三つ (玉福寺)

そば濡れし踊子の道冬椿

「黒船」てふ観光船や冬ぬくき

松陰のひそみし港小春風

石路は黄にハリス領事の棲みし寺 (玉泉寺)

ロシア兵眠る裏山冬あざみ

蕪汁

笠井 清佑

大蕪

吉田 希望

遷都祭終はれば枯野広がり  
短日や人の途絶えし大極殿  
枯草に埋れてをりぬ朱雀門  
高僧の皺深きかな年惜しみ  
白味噌と煮干の匂ふ蕪汁  
早朝の箸持つ手や息白き  
寒月や柳生の郷の夕間暮

冬日和カップに泡の残りけり  
秘密基地あらはになりぬ枯葎  
鼻風邪や口に広がる口の味  
冬耕の植木鉢まで及びけり  
黒猫に撫でられてをり大蕪  
家中を真つ直ぐにせり煤払  
数へ日や原稿用紙二行ほど

終活

宮崎左智子

年の暮

岡 佳代子

着ぶくれて持てあましをり紐の靴  
短日の厨にひと日割烹着  
喪のハガキポストに残る寒さかな  
捕獲箱にかかる野良猫年の暮  
冬の夜のひと間を灯し受験の子  
小春日や猫は背伸びを大胆に  
終活や急くまい急くまい餅を搗く

年の暮癖の直らぬ竹箒  
萩咲きて優しき言葉自づから  
寒梅や先づは文殊へ知恵詣  
積み上げし雑誌かたむく年の暮  
何となく過ぎすひとりの松の内  
万葉の相聞歌碑へ秋しぐれ  
雪霏々と日暮の道の遠かりき

瀬戸内界限

片岡久美子

紅葉

長濱 順子

水軍の裔と下城や山紅葉

紅葉散る水軍砦潮の風

水軍の本丸跡や冬礎石

冬空へ鉄音ひびく港町

羅漢笑む潮の匂ひの紅葉寺

造船のクレーン隔て山紅葉

ふるさとの亥の子の記憶わらべ歌

ベレー

新実 貞子

根来寺にて

川崎 利子

ロケットになりたき男の子七五三

ヌーヴォーの豊穰の赤試飲せる

燦々の秋陽浴びをりサンルーム

冬うちら服もベレーもパープルに

返り花一つ覚えのノーと云ふ

クレヨンの色尽すまで山粧ふ

トーストにバターとろとろ冬立つ日

首傾げる信楽狸もみち晴

午後二時の吾が家の紅葉眺めをり

白足袋の僧足早に紅葉坂

サフランやパエリア餐の旅思ふ

雪虫見知らぬ人と追ひかけし

さわさわともみぢの日の斑五輪塔

紅葉映ゆ書院の床の黒光り

赤頭巾の子ども地藏へ蔦紅葉

香煙の薫りしみじみ紅葉寺

日おもての山茶花の紅古寺閑か

枯蓮の池に古刹の鐘渡る

聖天堂の影揺らぎつつ冬の池

覚かくばん鏤忌僧兵偲び紅葉散る

鐘楼へつづく木漏れ日紅葉径

短日

田中 芳夫

夜回り先生

松田 和子

冬に入る熊野古道の起点の碑

夕鐘の租免地に散る銀杏かな  
(釣鐘屋敷・天満)

暮六つに冬の夕焼浮かびけり

寂寞の十月ざくら二三輪 (大坂城庭苑四句)

南指す城の午砲や冬木の芽

ロード・トレイン花野過ぎれば大揺れに

短日の天守に残る金落暉

夜回りの水谷先生講演中

厳かに紅葉織りなす夜の絵巻

秋冷の御堂に凜と薬師様

紅葉と色を競へり指月橋

京を誇る三宝院や秋盛り

朱重ねの弁天橋や池紅葉

泣き叫ぶ嬰におろおると冬日向

マイナスイオン

前川ユキ子

冬 櫛

伊藤 憲子

安曇野の空一枚や寒茜

小春日や並ぶ笑顔の道祖神

水琴窟に耳そば立てて秋惜しむ

朝市の人に載せられ冬りんご

鴨川に揺らめくネオン聖夜かな

山葵田にマイナスイオン秋の果

郷愁の水車音あり冬の蝶

突風に落葉逆まく京大路

柿落葉終の一葉を朶とし

脳トレの歌声ひびき冬うらら

吹き下ろす風の冷たさ地下出口

枝々に星を咲かせて冬櫛

数の子をぶちぶち噛める人魚姫

さくさくと紅玉林檜丸かじり

湯豆腐

藤見佳楠子

山茶花の散り継ぎてなほ日を溜むる

小夜時雨軒借る店の紅を買ふ

短日や靴の音さへ忙し気に

海鼠囁む口惜しき事胸に秘め

湯豆腐の踊り始めて打ち解ける

耳許に囁きのごと聖歌かな

聖菓切る亡夫の分まで数に入れ

熊談義

中村ふく子

ひもじさを知れる世代の熊談義

干し柿のひとつひとつに日の雫

逆光の彩をつくせる紅葉かな

奔放に落葉掛け合ふ塾帰り

とりどりの彩を纏へる菊人形

大櫂見上げては掃く落葉かな

十二月八日食パン賞味期限切れ

溪紅葉

中本 吉信

鉄柵に凭りて恐々溪紅葉

透くる日の満つる紅葉の万華鏡

無人駅線路際まで山紅葉

医通ひは長寿の箔や冬日和

寒林の向かうにきつと青い鳥

朝露の消ゆるはかなさ順不同

時雨忌や終の旅路の生駒越

秋の山

田村 幸子

秋日和実の熟れ頃をつつく鳥

山門や夕影長き落葉搔

秋うらら次客と持てる大茶盛

錦繡の秋を写せし池静か

宝玉の朝露を置く蜘蛛の糸

野路に咲く一輪の花風さやか

さながらに一幅の絵や秋の山

ふかし諸

桂

敦子

赤ケツト

五十嵐 勉

閉ざされし山門肅と秋の暮

ユトリ口の孤影浮かべり冬景色

繰り返す「これなあに」攻め秋うらら

石段の高きに熟柿古刹かな

ふかし諸いもづる知らぬ児とおやつ

薄もみじ趣深き古刹かな

小春日や仏の慈眼胸に沁み

開戦日

紀川

和子

十二月

和田森早苗

野仏の膝下にこぼれ実南天

荒北風や橋桁に鳴る工事幕

生涯を決める大事や受験前

神燈を登り詰めたり息白く

受験生には付かず離れず夜の静寂

妖精の華麗な舞やスケータ i

神風を信じた日々や開戦日

祇園街濡れて小春の石畳

菊の香の満ちたる部屋に目覚めけり

子牛像包むやはらか赤ケツト

もみぢ苑散るも残るも多彩なり

コーヒーの香に始まりぬ冬の朝

山積や大きき揃ふ蕪の尻

大鍋の牡蠣ふつくらと煮上りぬ

住むひとの絶えて山茶花武家屋敷

まあだだよ走り去る子や冬日和

震へてるメールの絵文字十二月

吾が家まで卑駄天走り息白く

年用意逝きて久しき母のこと

声高くテレビの前のちゃんちゃんこ

一つだけ青玉ポロリ年の市

# 瑠璃集

広目天の筆

宮田 香

鶉鳴けば広目天の筆動く  
ギヤマンに写る紅葉の柔らかき  
美しき言葉重ねて憂国忌  
列なして鹿通りけり神の前  
小春日や鶉尾に女帝の夢の果

賀状数枚

常田 創

親指とナイフと冬の葦かな  
綿虫を額に束ひがしへと  
人參や奥歯は頭蓋骨と知る  
賀状数枚答案は六百強  
初空や手に入れるべきもの二つ

峡の灯

松岡 和子

峡の灯のひとつとなりし夜長かな  
文机に見目よき葉付柚子ひとつ  
子らの声けふの刈田は土俵なり  
菊談義割れ煎餅の茶請かな  
山んばが通草引つ提げ戸を叩く

冬 芽

石川かおり

高曇り紅き冬芽の句読点  
冬林檎切つて始まる朝支度  
久闊の距離縮めたる炬燵かな  
気どりなき会話は宝冬日向  
障子越し針仕事せる祖母のみて

虎落笛

杉本 綾

ふるさとの思ひ出話夜の長き  
夕日燦さざ波ひたと瀬戸の橋  
穏やかや瀬戸の小島はもみづりて  
虎落笛生涯同じ山を見て  
腰骨の軋みなだめて落葉掻く

## 二月月号月評

塩路 隆子

二月号の編集をする頃がやっと師走の思いが深くなる。一年を振り返ってみよう。一人ひとり異なつた感懐が胸をよぎることであろう。よく頑張つていただいた。皆さんの一年間育まれた俳句は、形には見えなくても立派に根をおろし成長を遂げている。嬉しいことである。どうか自信を持つていただきたい。今月も新人にも句歴のある人たちにも秀句が目につく。

### 神鹿は終始耳立て夜の神事

小林 成子

十二月十五日から開かれる春日若宮おん祭を詠まれた中の一句である。古くから神の使いとされた鹿は、奈良では大切に保護されてきたが、おん祭ではその神事を終始見守っているかに耳を動かしていたと言う。奈良に生まれ育たれた作者は、奈良の全ての行事に精通しておられる。しかしこの句は珍しくその裏方としての鹿を詠まれた句として評価させていただく。祭の成功の影には鹿のみならずこういった人々の支えによるもの、奈良での作者の功績もあわせて称えたい。格調、安定感共に優れた句である。

### 健在を近隣に誇示大噓

阪本 哲弘

昨年、第一句集「山ざくら」を上梓された瓊の実力者である。長年腰痛に悩まされておられるがしつかりとした信念は、病んでおられず、月々立派な作品をみせて頂いている。一目瞭然、この句を見ても判るが、たまたまの大噓をこんな風に受け止められる作者は、決して病に負けない不屈の精神の持ち主である。恐らく噓のあとには腰を抑えられるほどの痛みであろうが「近隣に誇示」の措辞の強さが読み手に安心を与えてくれる。阪本氏健在の安堵を与えてくれた作品である。

### 龍馬伝語るに紅葉且つ散れり

北尾 章郎

毎月期限にはきつちり「琥珀集」鑑賞を続けていただきた意即妙の鑑賞はさすが北尾さんならではと好評をいただいている。時折「瓊」の吟行にも参加していただき北尾さんに来ていただくときでもその会に箔が付くね」とどなたかの声が聞こえてきたの思い出す。同感である。2010年は龍馬に明け龍馬に暮れた一年であった。「紅葉且つ散る」の季語は使いにくく、筆者も未だに敬遠している季語であるがうまく使われた。龍馬の情熱を惜しむ心を、十七文字中、八文字を使う季語でもって表現され成功した句である。